棋士 伊藤 匠さん

2024年に叡王、2025年10月には王座を奪取し、同い年の藤井聡太六冠と並び立つ存在となった伊藤匠二冠に、これまでの歩みや現代将棋に不可欠なAIとの共存について伺いました。＊1

AIの評価値を鵜呑みにせず自身の納得を追求する研究姿勢から、二冠を達成してもなお「もっと強くなりたい」と語る今後の展望まで、率直な言葉で語られています。

文中の段位、肩書などは、タイトル戦におけるタイトル保持者をその当時の肩書で記載しているほかは、2026年3月16日現在のものです。

聞き手・構成：伊藤 敬史、柏尾 稜、富田 寛之
写真撮影：佐藤 顕子

棋士になるまで

── 将棋を始めたきっかけを教えてください。

5歳の時に将棋の盤・駒をクリスマスプレゼントでもらったのがきっかけで始めました。

── すぐに魅力を感じましたか。

すぐにはまったと思います。

── どんなところに魅力を感じましたか。

考えることが好きな子どもだったので、考えて指していくことが面白いと感じたのだと思います。

── 宮田利男八段の三軒茶屋将棋倶楽部に通ったということですが、当時の思い出を教えていただけますか。

三軒茶屋には、将棋を始めて3カ月ぐらい経って通うようになって、そこから毎日のように通いました。師匠は、普段から面白い冗談を言ったりして、和やかな感じの教室でしたけど、自分がある程度強くなって奨励会を目指すようになると、厳しく接してくださいました。

── 同じ道場から本田奎六段や斎藤明日斗六段など強い若手棋士が出ていますが、どんな雰囲気でしたか。

その頃は、兄弟子の本田さんや斎藤明日斗さんも含めて、かなり強い子がその道場に集まっていて、ライバル同士で切磋琢磨できるような環境だったと思います。

── 小学3年生だった2012年1月の全国小学生将棋大会で、同い年の藤井聡太六冠と準決勝で闘って、伊藤二冠が勝って、藤井六冠が泣いている映像がよくテレビなどに流れますが、その時のことで印象に残っていることはありますか。

だいぶ昔のことなので…。でも、準決勝で藤井さんと指して、決勝で自分は敗れたんですけど、その2局の戦型みたいなものは記憶に残っていて、自分にとって印象深い大会だったのかなと思います。

── その藤井六冠とは、今では将棋界の頂点でタイトルを分け合っているわけですけど、同い年にそういう存在がいることを、どう感じていらっしゃいますか。

当時は特に思うことはなかったんですけど、藤井さんは、同い年で、中学生から棋士になられて活躍されていたので、ものすごい刺激をいただいたと感じています。

── 奨励会時代のことで心に残っていることはありますか。

奨励会には7年ぐらい在籍していました。中学3年生の時に三段に昇段して、その後に受験して高校に入ったんですけど、その高校をすぐに辞めました。今、思うと大きな決断だったと思うんですけど、当時は、すぐに決断してしまいました。

── そういう人生の大きな選択をすぱっと決断できるタイプですか。

同い年の藤井さんが活躍されているのを見ていて、

＊1：このインタビューは、2025年12月2日に行われた。

学校に行っている時間も惜しいといいますか、行っている場合ではないと感じて。そう決めたら、押し通してしまいました。

棋士として

── 2020年秋に四段に昇段された際に、当時の最年少棋士（17歳）ということで、かなり早く棋士になられたと思うんですけど、四段に昇段した時はどんな気持ちでしたか。

やっぱりほっとしたという気持ちが一番大きかったですね。三段リーグは本当に厳しいリーグ戦で、半年に1回しか上がるチャンスがないですし、また次に上がるチャンスがすぐに来るかどうかも分からないところだったので、昇段できる最初のチャンスをつかむことができてよかったなと感じました。

── プロになられた後、すぐに活躍されて、2021年に新人王を取りました。初めての棋戦優勝のお気持ちはいかがでしたか。

棋戦優勝という形で結果を出せたことはうれしいことでした。プロになってから1年ぐらいでの結果だったと思うんですけど、プロになってからある程度いい成績を残すことができて、自信につながった部分が大きかったと思います。

── 新人王の記念対局の相手は、当時四冠の藤井聡太さんでした。

3時間の持ち時間で藤井さんと対局する機会がなかったので、対局できることを楽しみにしていましたし、得るものが大きかったと思います。

── 得るものが大きかったというのは、例えばどんなことですか。

やっぱり力の差を感じましたし、自分に見えていないような勝ち方をされて、藤井さんの読みの深さを感じました。

── 伊藤二冠は、その後も勝率1位（2021年度）や最多勝利数（2023年度）など、大活躍をされていますが、2023年には竜王戦で初めてのタイトル戦に臨まれました。どんなお気持ちでしたか。

タイトル挑戦は目標にしていましたが、なかなかタイトル戦に出られるイメージがつかないところだったので、喜びが大きかったです。

── 藤井竜王への挑戦でしたが、どんなタイトル戦でしたか。

藤井さんとの力の差がはっきりと出たシリーズで、なかなか競り合いにもすることができなかったので、タイトル戦という注目される舞台で、ふがいない気持ちでした。

── その後、すぐ次に棋王戦で藤井棋王に挑戦されましたが、どんなお気持ちでしたか。

タイトル挑戦は常に目標にしてやっていることなので、またタイトル戦に出られるのは、うれしいことでした。

── その棋王戦の第1局では、角換わりの後手番で戦略的に持将棋にされたのが話題になり、「持将棋定跡」として升田幸三賞を受賞されました。あの将棋は、予め考えていらっしゃったんですか。

AIによる研究が盛んになって、かなり深いところまで定跡として調べられている時代に、角換わりは先手がいいとされている中で、将棋の最善を追求すると、後手が持将棋を目指すことになると考えて、持将棋になりやすい局面にしました。

── 升田幸三賞は、ご自身の編み出した戦法や新手への賞ということで、タイトルとはまた違う重みがありますね。

予想していなかったので驚きましたが、光栄なことだと思います。今はみんながAIで研究している時代なので、なかなか自分のオリジナリティを出すのは難しいと思うんですけど、戦術として画期的だったということで、それを最初に盤上へ表現したことを評価していただいたと思います。

── 3度目のタイトル挑戦となった2024年の叡王戦で、藤井叡王から3勝2敗でタイトルを奪取しました。叡王戦の第1局まで、藤井さんに公式戦で11連敗されていましたが、そこから3勝してタイトルを取るにあたって、何か気持ちを切り替えるみたいなことはあったのでしょうか。

特に何かを変えたから結果が出たとは思っていなくて、前年度からの1年間で、上位の棋士との対戦の機会が増えて、それによって自分自身の成長できた部分が大きかったのかなと感じています。

── タイトルホルダーになられたお気持ちは、いかがでしたか。

タイトルは一生に一度獲得できるかどうかと思っていたので、こんなに早く獲得できたのは、幸運だなと思いましたし、満足感は大きかったです。

── 2025年の叡王戦では、斎藤慎太郎八段の挑戦を受けて防衛しました。タイトル戦は防衛の方が難しいような話も聞きますが、どんな心境で臨まれたのですか。

今まで藤井さんとのタイトル戦しか経験していなかったので、相手が斎藤さんということで新鮮な気持ちで臨みました。ただ、叡王を獲得してからなかなか調子が上向かない時間が続いていたので、それを引きずってしまっている部分もあったと思います。よい結果が出なかったとしても、それはそれでまた次に生かしていけばいいのかなと思っていました。

── 防衛されたときは、どんなお気持ちでしたか。

やっぱりほっとしたというところです。

── 最終局は柏での対局でしたが、近くの研究所で脳年齢の測定をしたら、伊藤二冠の脳年齢が10歳だったというのが話題になりました。思考の柔らかさがすごいということですかね。

いや、どうでしょう。画面に数字がたくさん出てきて、それを1から順番に押して、どれだけ早くできるかみたいな形でしたが、どれぐらい信憑性があるものか正直分かりません（笑）。

── 学校の教科でいうと、どの教科が得意でしたか。

算数とか数学が好きで、得意だったと思います。

── 2025年10月の王座戦では、藤井王座から3勝2敗でタイトルを奪取して二冠になりました。伊藤二冠の強さが際立ったシリーズだった印象がありますが、どのように受け止めていらっしゃいますか。

叡王を獲得した時は内容としては押されている将棋が多くて、自分にとって理想的な勝ち方はなかなかできていなかったのですが、今回の王座戦では、1局を通して割とうまく指せた将棋も何局かあって、手応えを感じました。

── 研究を重ねてきたことで、藤井六冠との差を感じなくなっている感じですか。

いや、どうなんでしょうね。相手との差みたいなものは意識していなくて、今回の王座戦でも、自分の普段から研究していた形がはまったといいますか、自分の力を出せる展開に持っていけた部分も大きかったと思うので、自分の実力が伴っているかというと、まだそんなに実感していないです。

AIについて

── AIを使うようになったのはいつ頃ですか。

将棋ソフトを使うようになったのは、奨励会の初段頃、中学生の頃です。10年ぐらい前ですね。

── AIを使って研究する中で心掛けていることはありますか。

AIも絶対的に強いというわけではなくて、探索を深めるにつれて、読み筋や評価が変わってくることもあります。ですから、AIの評価を鵜呑みにするのではなく、自分が納得いくまで精査していくのが大事だと感じています。

── AIで評価値が高い手でも、どれだけ考えても自分の納得がいかない手というのはあるんでしょうか。

ぱっと見ただけではちょっと違和感があるということは、もちろんあるんですけど、その先の自分の気になっている分岐をいろいろ試していくと、最終的には納得することが多いのかなと思います。

── 10年くらい使っていらっしゃるということですが、AIの進化を感じることはありますか。

AIの進化はかなり感じることが多いですね。今までは形勢判断が難しいとされていた局面が、AIが進化することで、先手が有利など、ある程度どちらかに評価を出されてしまうことが多くなってきています。

── 皆さんAIを参考にするようになった中で、人間が指す将棋の価値というのはどういうところにあるとお考えですか。

AIが強いのは当然のことと考えていて、自分としては人間がどれぐらいAIに近づいていけるかというところに可能性を感じているというか、やりがいを感じています。

── 上位の棋士との対戦が多くなる中で成長していったというお話がありましたが、AIで研究するのと、対局での成長というのは、違うものなんでしょうか。

実際に公式戦という舞台で強い棋士と対戦してみないと得ることができないものも大きいと思います。結局は人間同士の勝負なので、強い人と対戦することで自分も刺激を受ける部分が大きいですし、強い人との対戦が日常になることで、そういう環境に適応していける部分はあると思います。

── これから先、AIとどのように共存、共栄していくと考えておられますか。

将棋界に限らず、AIは、様々な業界で発達していると思うんですけど、我々棋士が将棋を指すことで、いろいろな方に楽しんでいただけると思うので、自分と

しては、AIを使ってより高いクオリティの将棋を指すことで、いろいろな人に勇気を与えられるようなことができればと思っています。

ライフスタイル

── 対局の前日までの過ごし方や、対局当日の臨み方で心掛けていることはありますか。

自然体に過ごすようにしています。なるべく早く寝ることは心掛けています。

── 調子が悪いときもあると思うんですけれども、どういうふうに切り替えていますか。

自分の場合は、対局に負けた後の方が、より次の対局に向かって将棋に集中する時間が増えているような気がしています。なので、切り替えるというよりは、対局に勝つことに集中するようなイメージです。

── 生活の大半は将棋のことを考えていらっしゃるような感じですか。

まあ、そうですね。

── オフの時間、将棋と離れる時間というのはあるんでしょうか。

それはあります。

── どういうことをして過ごされていますか。

いろいろありますけど、野球を見ることも好きだったりします。

── 中日ドラゴンズのファンでしたっけ。

そうですね。

── 羽生善治九段が若い頃のインタビューで、将棋は完全なボードゲームというお話をされたのが残っていますけれども、伊藤二冠にとって将棋はどういったものですか。

いや、結構難しいですね。

── 私の勝手な印象ですけど、大きく分けて2つに分かれるのかなと思っていまして、将棋は人生の一部で将棋にすべて捧げるみたいなタイプの方もいらっしゃれば、あくまでボードゲームというふうな割り切ったスタンスを取られる方もおられるのかなと思いますが。

どっちの面もあると思いますね。もちろんボードゲームといえばボードゲームといいますか、将棋は完全な情報ゲームと言われていて、指し手の善悪のみで結果が決まるところがあると思います。ただ、よい将棋を指すためには、日々の過ごし方とか、体調管理とか、日々どういうことを思うかとか、長時間の対局ではいろいろな思いがわいてくる部分もあるので、日々努力と思って過ごすことも大事なのかなと考えています。

弁護士のイメージ

── お父様が弁護士なので、弁護士についてのイメージをお持ちのこともあると思いますが、弁護士について、どのような印象を持っていらっしゃいますか。

司法試験というかなりの難関を乗り越えて弁護士になられるということで、なるのが大変な職業だと感じていますし、父が弁護士なので身近な存在ですけど、いろいろなことを知っていて、頼りになる方が多いのかなと感じています。あと、話すことが上手な方が多いのかなという印象で、そこは自分もうらやましく感じています。

今後の目標

── 二冠を取られて、若くして道を極めていらっしゃる印象ですが、今後の目標をどのように考えていらっしゃいますか。

自分自身はまだまだ将棋の実力が低いと感じているので、もっと強くなる可能性を十分に感じていて、ここしばらくは、どれぐらい自分が将棋を強くなるかというところに挑戦していきたいと思います。

プロフィール　いとう・たくみ

2002年生まれ。東京都出身。将棋棋士（九段）。宮田利男八段門下。2013年奨励会入会。2020年四段昇段。タイトル戦登場5回。タイトル獲得3期（叡王2期、王座1期）。棋戦優勝1回（新人王）。勝率1位賞（2021年度）、最多勝利賞（2023年度）、升田幸三賞（2023年度）などを受賞。2026年順位戦でA級に昇級。